

Daichikyo News

大地協ニュース

大地協ニュース復刊 第5号

発行元：NPO 法人 大阪市地域福祉施設協議会

企画委員会《広報宣伝部》

発行日：2019年12月 第5号

担当窓口：望之門保育園 佐伯 剛

TEL 6651-7741

Fax 6652-8841

大地協の最新☆情報は右記→

QRコードをご覧ください。



大地協自然体験施設応援バザー—長居保育園

日時：2020年1月26日(日)10時～15時

『長～居おつきあい令和もよろしくねのバザー』開催!

《 平成から令和の年に 》

今年、年号が平成から令和に改まりました。昨年から今年にかけて東京では賛育会、興望館と創立100周年を迎えた施設が相次ぎました。1923年には関東大震災が起き、災害復興に大きな力が注がれました。また1959年の伊勢湾台風では愛知県南部が大きな被害を受け、この災害支援がきっかけとなって名古屋キリスト教社会館が生まれました。

こうした災害支援は社会福祉活動の一つの柱であります。直接現地での復興作業であったり精神的な支えや保育などもその一翼を担うものです。大地協では阪神大震災時には保育を、但馬の水害では模擬店を、熊本や東日本大震災では義援金で支援してきました。しかし今年、台風などによる水害が連続してしかも広範囲で起き、何もできないまま年を越そうとしています。

台風などの自然災害は地球温暖化という環境問題を抜いて考えられません。自然体験施設を運営して子どもたちに楽しい経験させるというだけではなく、環境問題を一緒に考える機会を応援バザーなどで取り組んでいきたいと思っています。

福祉人材の課題はなかなか深刻な問題です。「働き方改革」の取り組みが実施されていく中で、「セツルメント」の実践をしていくことが難しくなっています。大地協が“セツルメント”を標榜していますが、加盟施設の職員全員の意識がその方向に向かっているかという点で難しい状況であります。時間もかかるかもしれませんが組織の在り方、研修会・研究会の取り組み方をはじめ様々な課題について検討、見直しを行っていかねばなりません。難しい話し合いだけでなく施設を越えた交流ができるような企画も取り組んでいかねばますます遠ざかってしまうのでは…という危機感も持っています。



大地協がどのような方向を向いているかは役員会や企画委員会などの議事録を通じて十分でないかもしれませんがお伝えできるようになりました。今後については時間をかけながら加盟施設の皆さんの意見を反映させ、“セツルメントの精神”を活かしていく道を探っていきたいと考えています。

《 NPO 法人 大阪市地域福祉施設協議会・常務理事 小谷 啓二 》



中・高生キャンプ IN びわこセシルの家



「自分を 仲間を 自然を 生きることを 見つける…キャンプ」

2005 年中高生の宿泊キャンプとして山の家で始まった、中学以上キャンプ。ただ参加するだけのキャンプから、自分たちで考え創り出していくキャンプへ。そして各施設の、地域のリーダーとなれるように…中断されていた中学以上キャンプが、2018 年 9 月 3 施設の子どもたちで再開された。昨年は、阪南大学の看護師に「自分を大切に作る力とは」という題目で、性教育を正しく伝えて頂きました。今年度は、成蹊スポーツ大学の名誉教授に来て頂き、「自然環境を守るために私たちができること」を参加者全員で深め、地球を守る為には、もっと自然エネルギーが必要であることを学び考えました。

子どもたちからの問い掛けの時間として昨年度は「中学生の部活動の在り方について」「女子力について」「昔と今のライフスタイルの変化について」を全員で話を深めました。今年度は、「デザイナーベビーについて」「プラごみについて」「AI の進歩により変わっていく社会について」を討議しました。内容的に難しい言葉が並んでいますがプレゼンする子どもたちが分かりやすく説明し、全員が自分の意見を話せる議題にして、参加者が一人ひとりの意見に耳を傾け、自分の意志を人に伝え、新しい気付きに出会います。



プラごみについてプレゼンした子どもたちは、今までペットボトルの飲料水を毎日買っていましたが、最近では全員水筒を使用するようになりました。自由時間は誰が始めたか定かではありませんが、昨年は野外キャンプファイヤーで行うあそびを全員で室内で行い、今年はみんなで枕ドッジをして交流を深めていました。

施設毎に中学以上の子どもたちとの関わりには違いがあります。しかし、家や学校に居場所のない子どもたちの安心できる場所と出番は少なく、社会問題の 1 つとして捉える必要があります。ともに学びともに生活し、自分の考えを持ち、自分の違う意見の人たちの話を聞く。中学・高校・大学生、そして社会人が対等に話をする。子どもたちが社会の中の課題を自分たちの問題として深め考える事や、全く知らなかった世界の扉を開く作業もこのキャンプの大切な役割です。

学校ではできない事、そして子どもたちの主体的な動きを支援する、地域福祉施設の関わりを大切にこれからも継続させていきたいと思ひます。

◀ 育徳園子どもの家 吉田 正義 ▶

全国地域福祉施設研修会 第18回 ★ 児童部会

9月2日(日)長居ユースホステルにて行われた児童部会には、児童館、学童保育、保育士、学生等様々な職種の方が参加されました。“子どもの権利条約”について学ぶこの研修では講師にNPO法人 えんばわめんと堺 S代表理事の北野真由美氏をお招きしてご講演頂きました。“人との間にあ

る境界線”“人権”“いじめや暴力”“力関係”“虐待”等、一口に権利条約と言っても、様々な問題、課題、意識すべきことがありました。事前に現場で子どもたちに関っておられる方に、“子どもの権利条約”についてアンケートを実施し、174名の方にご回答頂きました。午後はアンケート調査結果と、実際に権利条約を意識した保育を展開した実践報告に基づき、グループディスカッションを行いました。子どもへの声の掛け方、行事が大人の都合になっていないか、時間に追われて子どもたちを急かしていないか、大人にも権利は存在する！等、まだまだ話し足りない程に沢山の意見が飛び交い、充実

した時間となりました。その後行われた懇親会では長居保育園に会場を提供して頂き、鍋をつつきながら、大阪名物“たこやき”を味わって頂きました。グループディスカッション第2弾というくらい話し込み、心もお腹も満腹になったのではないのでしょうか。秋分の日は昼と夜の時間が“等しく”なる日と言われていす。子どもと大人がどちらも権利は等しく、お互いが“主体”として共に生き、学び合える関係性を意識していくことが第一歩となるのではないかと思います。さあ子どもたちと共に生きる毎日を！

◀ 平和の子どもの家 岡村 慎一 ▶



「座談会から学んだ 福祉の繋がる力」

私が障がい児・者研究会に参加したのは去年でした。きっかけは、自施設にも支援が必要な子どもや療育に通う子どもが増えている中、指導員としてどのように子どもや保護者と関わっていくのか、学童保育でできる支援とはどういうことかを学びたいと思い参加しました。

そんな中、この支援者座談会が開催されることを知りました。開催に向けての打ち合わせの中、今回の司会・進行を務めることとなり、興味から一気に戸惑いと不安に襲われることになりました。緊張で上手く話せなかったらどうしよう。座談会で何を話せば良いのだろう…。緊張と不安でいっぱいの中、当日を向かえました。

この日のために、毎日アナウンサーのように司会の原稿を読みあげ、話すスピード・声のトーンなどをシュミレーションして、なんとか無事に終わることができました。自施設とはまた違った雰囲気の中での司会・進行はとても自分自身の経験や自信にも繋がったと思います。

座談会では、チームごとに分かれて今回のテーマとなった『〇〇から学んだ〇〇の力』ということを自施設の事例と共に意見交換をしました。私のグループでは、子どもから学んだ思いやり・発想力・笑顔の力など。それぞれの施設の職員の方がエピソードを話してくださり各施設の貴重な話や、保育でよく起きる場面での共感など、和やかな雰囲気の中で話をしながら一緒に考えることができ楽しい時間を過ごすことができました。

高齢者施設の職員の方からの話は、同じ福祉の現場で働いていても、保育と介護では全く考え方や意識が違うことを知り、職種が違うお互いのエピソードや施設の話が興味深く、普段なかなか話をする機会が無いのでとても貴重な時間を過ごすことができました。

緊張と不安で参加した今回の座談会でしたが、今では学びと繋がりが持てる時間と感じ、私の中で、障がい児・者研究会の意識が変わりました。これからも、大地協でいろいろな方と出会い、学んでいきたいと思えます。

◀ やまと保育園子どもの家 丸尾 咲貴 ▶



支

援



者



座



談



会



「命への祝福」

「〇〇から学んだ〇〇の力」というテーマで参加者の方々が語られたことに共通するキーワードとして、「つながり(利用者と利用者、利用者と支援者、支援者と支援者)」「地域との関係・地域の力をどう利用するか」「支援者と被支援者の関係」といったことが挙げられる。また、乳幼児や学童期の子どもたち、また、成人や高齢者との関わりを「〇〇から学んだ〇〇の力」というテーマで見直すことをとおして、「障がい」や「支援が必要」といった判断基準の正しさについて問い、考える機会となったのではないだろうか。

かく言う私自身は、支援者という立場で参加したわけではない。保育園と関係のある基督教の教会の牧師という立場で「地域の障がい児・者研究会」に関わらせていただき、今回の座談会に参加した。この研究会・座談会に参加するようになり、基督教と関係の深い福祉の現場での実践について教えていただくことで、イエスや聖書のメッセージを新鮮に受け止め直す視点を与えられている。

私が今回の座談会から感じたことは、支援を必要とする人びとが持つ社会的な意義の大きさである。支援者の方々のお話をとおして、障がいを持つ人や高齢者の存在によって、周りを変えられていったという話をたくさんお聞きした。「障がい」や「高齢」は、何かができないというサインとして見なされ、社会のすみで追いやられてきた。しかし、「障がい」や「高齢」ゆえに支援を必要とする人びとが真ん中に置かれるとき、社会の在り方が変えられていき、そこに命への祝福を見出すことができるのではないだろうか。

そして、その人がどのようにすれば生きやすくなるのかを考え、実行する力、人一人ひとりを大切にする力が私たちには与えられていて、その力の使い方を模索することから、地域共同体の新しい在り方が見えてくるのではないかと考えさせられた。命への祝福が見出される現場の最前線で大切な働きを担っておられるの方々のお話から新たな希望を与えられ、心より感謝申し上げる。

◀ 日本基督教団阿倍野教会牧師 山下 壮起 ▶

②②①⑨.①②.②②

障がい児・者研究会
障がい児・者研究会

澄み切った朝の空気を吸い込み、澄み渡った青空を眺めながら日曜日ののんびりした町の中をKCC会館にむかって歩いていく。

12月8日(日)この日は『さとにきたらええやん』大地協自主上映会の日。

100名にもなる多くの方たちが参加し、ともにひとつのスクリーンから映画を通じて感じた思いをご紹介します。

★姉が精神の病気で甥っ子のふたりが里親さんの所にいます。(今回の内容と)とても重なるところがたくさんあり、甥っ子の気持ちを考えると心が痛みました★

★たくさんの事例を聴かせていただき大変興味深かったです。夜回り、無国籍、生活保護など知らないことを少しずつ学んでいきたいと思います★

★子どもが生きることは当たり前やと思います。しかし、色々な人生があり、生活があり、そうではない子どもたちがたくさんいることを知りました★

★荘保先生のお話の内容があまりにも自分の周りにいる子どもと違いすぎて正直、戸惑いもありました。資料にもあった異常な状況での正常な反応。その行動自体は許されないことだと思っていましたが、今日のお話を聞いて西成や釜ヶ崎、あいりん地区についての自分の見方を考え直すきっかけとなりました★

★子どもの生きる力を大切にしたいと思いました。本当にしんどい時こそ人には言えません。そのことをもっと見て少しでも子どもたちの力になりたいと思いました★

★子どもと同時に保護者にも寄り添って支援している姿が印象的でした。傾聴の姿勢がなくスタッフが威圧的という感想が上がっていましたが、社会的にいけないことをした時や、子どもが今まで育った中で得た常識を変える(暴力は絶対にいけないなど)には、時には強い言葉をかける必要もあると思いました。映画の中で見たスタッフの方の言葉を私は威圧的だと思いませんでした。人を守るための厳しさは大切にしていきたいです★



『さとにきたらええやん』 大地協自主上映会

★20 数年前に年末の夜回りに参加する。お邪魔したところは「あ〜ここだった」と久しぶりにつながり私の時間と離れた時間は当たり前だけど変わらず続いていたことを実感しました。いろいろなシステムを分かりやすく教えていただきました★

★映画の感想は人とのつながり方がすごく丁寧に人と人がつながって西成の雰囲気も変わってきているなと思った。自分も人との関わり方や考え方がすごく学べました★

★異常な状況の中での正常な反応ということに納得しどう子どもたちに接していくのか考えなおしたいと思いました。認めることのできることを大事に動こうと思います★

★映画を見て里は親と子たちの心の支えだと思いました。トークセッションでは今の子どもたちの現状を知り心が痛みました。私たちもできるだけ子どもたちを支えていかないとけないと思いました★

★今後、自分の人生をつくる子どもたちに、どのように社会や生活の仕方を伝えるか改めて考えようと感じました。保護者(親)がモデリングできない子どものためにモデルになるよう言葉づかいから見直すべきだと思いました★

★子どもにとって何が一番大事なのか、生きた学びや夜回りなど、子どもの心に届く取り組みにとっても感銘を受けました★

★“話を聞き出すことだけが『寄り添い』ではない”。映画を観て映画で大事にされていたのは表情でした。どの子ども感情を出す前にテンポ遅れがある。笑う時も悲しむ時も「ためらい」が一瞬ありました。荘保さんがトークセッションの中でおっしゃっていましたが、子どもたちは親のことを強く思って行動していること。感情を出すことにもためらいがあるのに、教師に話を聞かれて素直に話せる簡単に話せる子どもがいるのでしょうか。感想の中に「話を親身に聞き出す姿勢が見えなかった」との意見があったのですが非常に残念です。ふとした一瞬の表情、非行行動…その裏にある子どもたちの背景、SOSに気づくことが本当に「寄り添い」なのではないでしょうか。本当の“寄り添い”方を知ることができました。荘保さん、主催の皆様ありがとうございました★

★こどもの里のスタッフさん本当にご苦労様です。「人としてとてもまっとうなことで、正しい、優しい」と思います。大きくなった子どもたちの中には過去の事情を言ってくれる人は、まともな力が強く育って良かったと思いますが、弱い人や力の強くない人は、大人はうわべだけを取り繕って私のことは聴いてくれない。と自分とはるに足らない存在と思うかも★